



## Round Table Discussion

**島田安博**

司会

Yasuhiro SHIMADA

高知医療センター副院長・  
腫瘍内科長

**濱口哲弥**

Tetsuya HAMAGUCHI

国立がん研究センター中央病院  
消化管内科病棟医長

**石黒めぐみ**

Megumi ISHIGURO

東京医科歯科大学大学院  
応用腫瘍学講座准教授

**山崎健太郎**

Kentaro YAMAZAKI

静岡県立静岡がんセンター  
消化器内科医長

# 術後補助化学療法の最新データを読み解く

**R0** 切除が行われたStage IIIの大腸癌に対して、再発抑制を目的に術後補助化学療法が行われている。しかしStage II大腸癌や直腸癌における有用性、高齢者における治療選択、さらにオキサリプラチン併用が望ましい患者選択などに関してはまだ結論が得られていない。

2015年の米国臨床腫瘍学会(ASCO 2015)では、経口抗がん剤による術後補助化学療法の国内臨床試験であるJCOG0910試験、ACTS-CC試験、ACTS-RC試験の成績が報告された。さらにFOLFOXによる術後補助化学療法の投与期間に関する国際共同比較試験の中間報告も行われた。

そこで当座談会では、最新の臨床試験の成績を総括し、国内における実臨床での術後補助化学療法の選択や今後の課題について討論していただいた。

## はじめに

**島田** 『大腸癌治療ガイドライン』が2014年1月に改訂され、その中で5-FU+ロイコボリン(LV)、UFT+LV、カペシタビン、FOLFOX、CapeOX (XELOX)が、それまでのデータに基づいて推奨レジメンとなっています。

それ以降、いくつかの研究が報告され、ASCO 2015では、JCOG0910試験、ACTS-CC試験、ACTS-RC試験の結果が発表され、FOLFOXの投与期間に関する検討の中間報告も行われました。本日はそれらをレビューして、その解釈と問題点、今後の研究の方向性について議論をしていきたいと思っています。